

にほんごと にほんぶんか

日本語与日本文化

(第一辑)

施小炜

主编



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

日本語与日本文化

(第一辑)

施小炜 主编

上海交通大学出版社

内 容 提 要

本书定位为以日本为研究对象的综合学术文集,涵盖日本文学、文化、中日关系等诸多方面,突出对最新文学文化动向的观察与研究,同时也关注年轻人广泛喜爱的当代流行文化。本书适合对日本文学、文化等有关关注的学习者、研究者阅读。

图书在版编目(CIP)数据

日语与日本文化. 第1辑/施小炜主编. —上海:上海
交通大学出版社,2010
ISBN 978-7-313-06341-0

I. ①日… II. ①施… III. ①日语—研究②文学研
究—日本 IV. ①H36②I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 043134 号

日语与日本文化(第一辑)

施小炜 主编

上海交通大学 出版社出版发行

(上海市番禺路 951 号 邮政编码 200030)

电话: 64071208 出版人: 韩建民

常熟文化印刷有限公司印刷 全国新华书店经销

开本: 787mm×960mm 1/16 印张: 12.75 字数: 214 千字

2010 年 5 月第 1 版 2010 年 5 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-06341-0/H 定价: 25.00 元

版权所有 侵权必究

编者寄言

一、《日本语与日本文化》今天终于问世了。群芳怒生、万木参天的日本研究园地里，一株新苗悄然破土而出。她柔嫩弱小，盼望在各位前辈方家青眼呵护下，茁壮成长。正是上林烂漫时，千红万紫遍天涯；野花不解春惆怅，也放东风第一枝。

二、较之日本对中国的研究与了解，我们的日本研究日本理解无疑尚有必要的功课待做。《日本语与日本文化》愿为普及与深化国人的日本理解尽绵薄之力。

三、《日本语与日本文化》拟定位为以日本为研究对象的综合学术研究文集，涵盖日本文学、文化、中日关系等诸方面，就中突出对国人关心而资讯较欠缺的最新文学文化动向的观察与研究，同时对广大青年学生广泛喜爱的当代流行文化，亦拟纳入研究视野。

四、《日本语与日本文化》追求的目标是：立足本校，面向学界，海涵地负，兼容并包。至诚欢迎校内外、海内外学者、研究者惠予支持，不吝赐教。

五、本集执笔者皆为上海杉达学院日语系专职或兼职教师。

执笔者一览

周 保 雄	上海财经大学副教授
王 建 康	日本千岁科学技术大学教授
李 晓 梅	同济大学副教授
黄 博	上海杉达学院专任讲师
红野 谦介	日本大学文理学部教授
张 乐 风	上海杉达学院副教授
十重田裕一	日本早稻田大学教授
徐 晓 纯	上海杉达学院助教
篠崎美生子	日本惠泉女学园大学准教授
施 小 炜	上海杉达学院教授
吴 冬 青	上海杉达学院副教授
徐 静 波	复旦大学副教授
刘 莹 婕	上海杉达学院 2007 届毕业生

目 录

【文化】

- 紫はなぜ冠位十二階の最上位に配列されたのか …………… 周保雄 (1)
- 日本民间传说与中国古代的北辰信仰、龟信仰
——“浦岛太郎传说”中的“紫色”与“龟” …………… 王建康 (10)

【文学】

- 清少納言と「ほととぎす」
——漢詩文における「杜鵑」と比較して …………… 李晓梅 (19)
- 『源氏物語』の「蛩」巻物語論から見る中日文学論の影響
——「毛詩大序」から「蛩」巻の物語論へ …………… 黄 博 (36)
- 君王的“普通人宣言”能够被原谅吗？
——从芥川龙之介的《鼻子》谈起
…………… 篠崎美生子、张乐风(译) (56)
- 被塑造的“日本”的作家肖像
——经济高速增长期的川端康成 …………… 十重田裕一、徐晓纯(译) (69)
- 不条理が日常になった時
——太宰治「待つ」論、その文学の「普遍性」を視野に …………… 施小炜 (85)
- 20 世纪后叶的日本文学 …………… 红野谦介、张乐风(译) (109)

【日本語】

- 「ウメ」の語源に関する「烏梅」説について …………… 吴冬青 (144)

【鸿影萍踪】

- 山口史迹踏访记 …………… 徐静波 (175)

【优秀毕业论文】

- お花見について
——桜が死とつながる諸理由の考察 …………… 刘莹婕 (187)

紫はなぜ冠位十二階の最上位に 配列されたのか

周保雄

色彩也是文化。古代中国的色彩观不妨说基于独特的宇宙论,日本的色彩观则接受了中国的色彩文化,却也自有其独特之处。在中国曾经被视为贱色的紫色,在日本却被定为冠位十二阶中最高位的配色。同一紫色,在中日两文化中有何不同呢?

一、はじめに

色彩は文化の一つである。古代中国の色彩観は宇宙論に根ざしたと言っても過言ではないが、日本の色彩観は中国の色彩文化を受容したものが多く、有力な証拠として奈良のキトラ古墳にある玄武と、高松塚古墳の青龍、朱雀、玄武、白虎が取り上げられる。色彩に関しては、日本独特の発想もあるのは当然なことである。例えば、日本最初の色名はしろ、あか、くろ、あおで、始めはみな、光の明暗状態から出てきた言葉に限られたが、後にある系統の色を総括する名称に変わり、やがて白、黒、赤、青などのような特定の色を指すようになっていたのである。

紫色は今では東西を問わず、高貴で、神秘的な色と目されている。中国では卑しい色と嫌われた時もあるが、日本では、帝王紫のように尊ばれている。小論では中日文化における紫の異同を論じて、紫が冠位十二階の最上位に配列された原因を明らかにしたい。



二、中国文化における紫

1. 宇宙論に根ざした中国の色彩観——陰陽五行と五色

古代中国の宇宙論の中核は陰陽五行である。万物は日、月の陰陽と木、火、土、金、水の五行によって生じられる。方位については、土を中心に、東を木、南を火、西を金、北を水とされ、季節や色彩、人間生活全体もこの陰陽五行にまとめられている。

『禮記・月令』によると、天子は、立春に際しては青馬に乗り、青衣青玉を付けて東郊に春を迎え、立夏には、赤衣赤玉を付けて南郊に夏を迎え、立秋には白衣白玉を付けて西郊に秋を迎え、立冬には黒衣黒玉を付けて北郊に冬を迎え、夏の土用に際しては、黄衣黄玉を付けて中央の大廟に居すとある⁽¹⁾。この青、赤、白、黒、黄は正色とし、間色より重視された。色彩と方位の関係は神格化されて、東＝青竜、南＝朱雀、西＝白虎、北＝玄武、中央の黄は天子だという中国独特な思想が生まれた。自分の代表色として、四千年前の夏王朝は青を、次の殷王朝は白を、周は紅を、秦は黒を尊んだ。色彩はただ物的な存在ではなく、国家の盛衰に繋がっていると思われていた。間色の紫が正色である赤を圧倒した世相を見て、周の文化を理想とした孔子は「紫の朱を奪うを惡む」⁽²⁾と嘆いたのである。

2. 卑しいと見られた間色——紫色

正名や正色の正統性を重視した中国の古代文化の中で、間色の紫は下位に置かれた。『礼記・玉藻』によれば、「衣は正色、裳は間色」と定められて、間色である紫は衣の色にはしてはいけず、下着の色に限られた。「君子は紺緌を以って飾らず。紅紫はもって褻衣と為さず」⁽³⁾。つまり、君子は紺色や赤茶色では襟や袖の縁どりをしなかったし、中間色の紅や紫は礼服にはもとより平服にも使われなかったのである。理由といえば、色や「名正しからざれば、すなわち言順ならず。言順ならざれば、すなわち事ならず。事ならずんば、すなわち礼樂興らず」⁽⁴⁾によるからである。前漢末の王莽(在位 8～23)の時に至っても、「紫色鼃声、余分間位」⁽⁵⁾という規定もあって、間色の紫は邪音の鼃声と同様に下位に配列された。



3. 楚文化や秦文化の中の紫

中原文化の色彩観と異なり、卑しいと見られた紫色は楚文化や秦文化の中で、別様に取り扱われた。

「魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮珠宮(魚鱗の屋龍の堂、紫貝の闕朱の宮)」(『河伯』)や「築室兮水中、葺之兮荷蓋、蓀壁兮紫壇、播芳椒兮成堂(室を水中に築き、之に荷蓋を葺く。蓀の壁紫の壇、芳椒を菊きて堂を成し)」(『湘夫人』)、「秋蘭兮青々、綠葉兮紫莖、滿堂兮美人、忽獨與余兮目成(秋蘭青々、綠葉紫莖あり。堂に満つる美人、忽ち独りわれと目成す)」(『少司命』)⁽⁶⁾のように、「紫」は『楚辞・九歌』の中に計3回出たが、卑しい色ではなく、みな美しいイメージを表している。

今は色は殆ど褪せたが、実は兵馬俑に付けた色彩の中にも美しい紫色があった。秦の時代、築かれた長城は土色が紫色なので、紫塞と呼ばれ(崔豹『古今注・都邑』を参照)、「南馳蒼梧漲海、北走紫塞雁門」(鮑照『蕪城賦』)のように、紫色は美しい色合いとして使われたのである。

4. 紫の地位の上昇

(1) 礼楽崩壊時代の紫

「紫を惡むは其の朱を乱すを恐れるればなり」⁽⁷⁾と孔子は嘆いたが、この心配から間色の紫が正色の朱より人目を引き、もてはやされとうかがえる。下位にありながら、紫は人々に好まれていたためである。「斉の桓公紫を服するを好む。一国儘く紫を服す。是の時に当りて五素にて一紫を得ず」⁽⁸⁾という記載に当時の世相がよく現れていた。合従連衡の乱世、礼楽崩壊の時代、色などの秩序が乱されて、紫は下位から上昇しつつあり、裳の色から諸侯の服の専用色にでもなった。哀公十七年(紀元前478年)、「良夫衷甸両牡に乗り、紫衣狐裘して、至り、裘を祖ぎ、劍を釈かずして食ふ。太子牽いて以て退かしめ、これを數むるに三罪を以てこれを殺す」⁽⁹⁾。この三罪の中の「紫衣」は国王の服で、良夫が国王の専用色を使ったので、罪に問われたのである。

(2) 天文、宗教などの影響——紫微星、紫宮、紫禁、紫皇、紫氣など

紫色は赤と青の中間にあって、捉えにくいという原因か、不思議な色と目されている。その神秘性を帯びるから、道教などにゆかりを結ばれて、上位の色とされているのであろう。「西望瑤池降王母、東來紫氣滿函關」(杜甫『秋興』)はその一例だと思う。福永光司氏の研究では、「紫色が西暦前三～二世紀、秦漢の



時代から宇宙の最高神として文献上に出現する太一神の住む宮殿を象徴する尊貴な色とされ(『淮南鴻烈』天文篇)、ないしは太一神を祭る漢の皇帝たちの甘泉宮に設けた祀壇もしくは祭場の幄とばりを象徴する聖なる色とされるのは(『漢書』礼楽志、『文選』揚雄「甘泉賦」)、太一神が漢代に北極星の神格化されたものと解釈され、その北極星の天空から地上に放つ光芒が紫色とされたからであった」⁽¹⁰⁾。

越国の范蠡は天象を見て、「紫宮」を真似て小城を築いた⁽¹¹⁾。『淮南子・天文訓』によれば、「紫宮者、太一之居也」、つまり、紫宮とは紫微宮、天帝の居所である。天上の紫微宮を真似て作られたのは地上の天子の居所なので、紫宮や紫微宮は王宮の代名詞になった。『文選・左思・咏史之五』の「列宅紫宮里、飛雲若雲浮」の「紫宮」はその通りである。後世は皇帝の車輦を紫軹、皇帝用の印肉を紫泥と言ひ、紫青や紫衫、紫服も高位貴官の代称とされている。中国文化の中で紫の極みは紫禁城と言っても差支えが無かろう。

三、日本文化における紫

1. 表音文字としての「紫」

周知のように、昔、日本には文字がなかった。紀元5世紀ごろ、『論語』や『千字文』などが百済から日本に伝来したと伝えられ、中国文字の導入はその時である。最初は中国語を「真名」としてそのまま使った同文の時期であったが、後に中国語の音を借りて日本語を表記し、仮名が形成されるようになった。「紫」という字もたいてい同じようである。『古事記』の中には「紫」という字はすでに出たが、「筑紫」(九州の古称)のように、表音文字として使われ、色彩学の意味はまだ持っていなかったようである。

2. 中国の思想や色彩観を受容

漢籍が大量に日本に伝来して、漢文化を受容したと同時に、中国語と同じ意味の漢字、たとえば、「紫」も使われるようになった。「紫禁」や「紫宸殿」は天皇のことに使われ、「紫紺」、「紫煙」、「千紫万紅」、「紫根」など、色相を表す「紫」も多用された。日本国の天皇もしくは天皇家を象徴する聖なる色を紫とする思想信仰も中国の北魏に源を持つと福永光司は見ている。天皇は『緯書』の中に見



える宇宙の最高神・天皇大帝の略称であり、「その天皇の住む天上世界の宮殿を明確に「紫宮」と呼んでいるのは、二世紀、後漢の張衡の「思玄賦」(『文選』卷十六)であるが、天上世界の天皇(天皇大帝)の委託を受けて地上の世界に君臨する皇帝(天子)の宮殿を同じく紫宮と呼んでいるのは、四～六世紀、北中國を強力に支配して道教を国教とした北魏の王朝であった。」⁽¹²⁾

3. 「むらさき」の登場

紫という字は日本独創のものではなく、中国から伝わったのである。万葉仮名の場合、牟良佐伎と記したことがある。「牟良佐伎は根をかも終ふる人の児のうら愛しけを寝を終へなく」(『万葉集』東歌 3500)の「牟良佐伎」は「むらさき」のことで、やはり紫根という植物を指すのである。紫根は「万病に効果がある夢の漢方薬草」(牧野富太郎著『日本植物図鑑』)として日本に伝来された。幾つかの例外を除き、昔、日本の植物性染料は殆ど薬草であった。紫根はムラサキの根で、解熱・解毒の薬、皮膚病の薬などに用いられ、江戸の名医として知られている華岡青洲が紫根で作った「紫雲膏」は、やけど・痔の特効薬として名高いものである。そのゆえ、日本での栽培も昔から行われた。中国ではずっと昔から紫根の根から紫色を取って、染料に使われ、その方法も日本に伝えられた。江戸八代将军吉宗のとき、武蔵野においてムラサキ草を栽培して、紫染を大いに推奨し、吹上御苑内に染殿を建てて紫染を研究させたお話もある。紫根から取った紫色は高貴な色として珍重されているし、植物自身も白く可憐な花を咲かせるので、ムラサキは日本文化で高い地位を占めている。『万葉集』には紫を詠んだ歌が17首もあり、「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」、「紫のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」⁽¹³⁾ 額田王と大海人皇子との贈答歌は今でも愛誦されている。その「紫野」は紫草を栽培していた園のことであり、そのとき、紫草は薬草としても染草としても大切にされたそうである。また、清少納言の『枕草子』では、「葡萄染の織物。すべてなにもなにも、紫なるものは、めでたくこそあれ。花も糸も紙も。」(「めでたきもの」)と賞賛され、紫式部の『源氏物語』では才色兼備の最高の女性が「紫の上」と名づけられ、紫は高級の色として染織や襲の色目にも多用されている。文化文政の頃(1804～1830)、醤油は塩の7～8倍という高価で、色も暗紫色で似ていることとあいまって、「むらさき」とも呼ばれたのである。



四、紫と冠位十二階

中国では「衣は正色、裳は間色」と定められたが、日本では紫が卑しいという発想もないし、冠位十二階と結び付けられてから、紫色は日本文化でもっとも大きな意義を持つようになった。

政府機能を強化するため、聖徳太子は『憲法十七条』、『冠位十二階』などを制定して、いろんな改革を実施した。

推古十一年(603年)、聖徳太子は「十二月の戊辰のついたち壬申に、始めて冠位を行う。大徳、小徳、大仁、小仁、大礼、小礼、大信、小信、大義、小義、大智、小智、合わせて十二階、ならびに、当色の繩をもって、これを縫えり。」⁽¹⁴⁾これは冠位十二階で、徳・仁・礼・信・義・智をそれぞれ大小に分けて十二階とし、冠を紫・青・赤・黄・白・黒という六種の色で、大小はその濃淡で区分けして、位階を示した。注意すべきところは仁・礼・信・義・智の五常の上に徳を置き、陰陽五行説の五色——青・赤・黄・白・黒の上に紫を加えたものである。冠位十二階は明らかに中国や百済の影響を強く受けたが、中国の色彩観をそのまま受容せず、それをベースに日本独特なものを形成したのである。中国の五常、五色の順序を破ったのはいったい何のためであろうか。

紫が冠位十二階の最上位に配列された理由について下記のことが考えられると思う。

1. 新興国家としての平等意識

『隋書・倭国』に「倭王は天を以て兄と為し、日を以て弟と為す。天未だ明けざる時出でて、政を聴き、跣趺して坐す、日出ずれば便ち理務を停め、我が弟に委ねんと云うと。」⁽¹⁵⁾と記されている。もしもそれは夜郎自大だったら別にして、当時の日本では漢籍が大量に伝えられ、中国の事情に詳しい人が少なくなかった。中国では皇帝を天子と称したが、日本では天を兄、日を弟にして、中国の文化と違い、その独立性を表明する意図は明らかであろう。

推古十五年(607年)、小野妹子が遣隋使として中国に派遣された。煬帝への国書に「日出る処の天子、日没する処の天子に書を致す、恙無きや」と書いて、対等に付き合うのを求めようとした。これを見て煬帝は怒り、「蛮夷の書、無礼な



るもの有らば、復た以聞することなかれ」と鴻臚卿に言いつけた。⁽¹⁶⁾ なぜかという、当時、中国の周辺の国々は中国に対して臣下の礼をとり、絶対服従の態度で臨まなければならなかったからである。

上記の2例から見ると、日本は中国文化を取り入れたと同時に、新興国家としての平等意識を持つようになった。

仁・義・礼・智・信は五常の徳だが、冠位十二階では徳が仁の上に置かれたことも注意すべきだと思う。

中国の春秋・戦国時代は動乱の時代とも言われ、戦争が多くて、殺伐な時期なので、その時の中国人にとって仁が何よりも最優先されたのは当然なことであろう。しかし、当時の日本は独立国として発足したばかりで、先進的な大陸の文化を学び、典章、儀軌、法令などの制度を確立して国家を治めることに重きを置いていた。冠位を決めて執政するには徳政を欠かすことはできない。日本の年号がすべて中国の典籍から取ったように、治国の方略は同じ傾向を持つかもしれない。十二階の中、徳が仁の上に置かれた根拠は「政を為すに徳を以ってすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之に共するが如し」⁽¹⁷⁾にあると思う。そういう面から見ると、徳を以って政を為すことは国家の指導者の基本となり、冠位を決めて政を為すには徳は欠かせない。面白いことに、ここで「徳」は紫と関連されてきたのである。なぜかという、北辰とは北極星であり、紫微星であり、「政を為すに徳を以ってすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之に共するが如し」なのである。「北辰居其所、而衆星共之」というのは紫宸、紫宮の嚆矢と言ってもよかろう。

2. 暦書との関連

冠位十二階は日本当時の典章制度の集大成とも言える。推古十一年、聖徳太子は冠位十二階を決め、翌年、『憲法十七条』を公布し、同年九月、朝禮の法を定めて、皇位の尊厳と君臣の別を明らかにした。その一連の行動は一時の気まぐれではなく、暦書に何か関連があるのではなかろうか。冠位十二階は位階制だけど、何か深意が秘められたようである。暦を調べればわかるように、推古十一年はちょうど甲子である。唐の高祖は甲子の年に即位し、隋の義寧二年を唐の武徳元年と改元した⁽¹⁸⁾。「王者姓を易へ命を受くる、必ず始初を慎む。正朔を改め、服色を易へ、天の元に推し本づけ、厥意を順ひ承く」⁽¹⁹⁾というのはその由緒ではないかと思う。暦本、遁甲、方術などに詳しい聖徳太子は甲子の年に



そんな重大な措置を取るのは「始初を慎む」からと言っても過言ではないだろう。

3. 中国と違う色彩制度

昔、日本の律令制度はまるで中国のものをコピーしたようなものであつた、持統七年、持統天皇は「天下の百姓をして黄色の衣を、奴は卑を服しむ」⁽²⁰⁾と詔を下した。中国では黄は皇帝の色、黒は役人の色と規定されたのに、日本ではそれらを庶民の色にして、従来、受容した中国の色彩観を突破した明証である。

4. 聖人との関係

中国人にとって聖人が偉い存在で、聖人に学び、聖人になりたいのは理想であつた。一代の名君と称された唐太宗にしてもその徳は「斉聖」と褒められた(『旧唐書・本紀第一・太宗』)⁽²¹⁾。それに対して、日本の場合は、「斉聖」や「超凡入聖」でなく、聖人を超えようとした。太安万侶が撰録した『古事記・序』には「(皇帝陛下)「名高文命、徳冠天乙」と記載され、名声は夏の禹王よりも高く、徳は殷の湯王より勝るというのである。

冠位は上下の秩序を正し、禮を治めるための外形的方法であり、冠位に配された色は、冠位を識別する視覚的方法であるため、位階に配された色は単なる色彩ではなく、その背後には冠位があり、政治上基本的な意義を持つものであつたと推測される。もちろん、中国の影響を脱出しようとする努力もある。

五、終わり

以上の分析を通じて、中国の紫色は宇宙論に根ざした色彩観から次第に紫色の物質的な性質の重視へ転換したが、日本文化の中で、「紫の朱を奪うを悪む」という陳腐な考えがなく、紫を最上位に置くと同時に、日本民族の強い自我意識を表明し、全面的な漢化から日本化へ転換されていったとうかがえた。

注

(1)『論語・陽貨』、山口剛編、『世界大思想全集 53』、春秋社、昭和6年、P. 56



- (2) 『論語・郷党第十』、山口剛編『世界大思想全集 53』、春秋社、昭和 6 年 P. 37
- (3) 『論語・子路第十三』、山口剛編『世界大思想全集 53』、春秋社、昭和 6 年 P. 44
- (4) 班固《漢書》、第 12 冊、中華書局、1962 年 P. 4194
- (5) 朱熹《楚辭集注》、上海古籍出版社、1979 年 P. 43
- (6) 朱熹《楚辭集注》、上海古籍出版社、1979 年 P. 36
- (7) 朱熹《楚辭集注》、上海古籍出版社、1979 年 P. 40
- (9) 『諸子集成 5 韓非子集解』、上海書店、1986 年 P. 210
- (10) 『諸子集成 7 淮南子・天文訓卷 3』、上海書店、1986 年 P. 39
- (11) 佐々木信綱編『新訂万葉集』、岩波書店、1992 年 P. 49
- (12) 小島憲之、『新編日本古典文学全集 3・日本書紀②』、小学館、1996 年 P. 541
- (13) 『論語・為政第二』、山口剛編『世界大思想全集 53』、春秋社、昭和 6 年 P. 19
- (14) 平岡武夫主編、《唐代的曆》、上海古籍出版社、1990 年 P. 1
- (15) 小島憲之、『新編日本古典文学全集 4・日本書紀③』、小学館、1998 年 P. 535
- (16) 倉野憲司校注、『古事記』、岩波書店、1993 年 P. 212

参考文献

- [1] 小島憲之. 新編日本古典文学全集・日本書紀. 小学館, 1996.
- [2] 小島憲之. 新編日本古典文学全集・万葉集. 小学館, 1994.
- [3] 山口佳紀. 新編日本古典文学全集・古事記. 小学館, 1997.
- [4] 藤野岩友. 漢詩大系 3・楚辭. 集英社, 1967.
- [5] 塚本哲三. 漢文叢書. 有朋堂, 1921.
- [6] 加地伸行ら. 鑑賞中国の古典・論語. 角川書店, 1987.

日本民间传说与中国古代的北辰信仰、龟信仰

——“浦岛太郎传说”中的“紫色”与“龟”

王建康

遅くも平安時代に、古代中国の亀信仰に次いで、北辰信仰を具現する「紫煙」（もしくは「紫雲」）は別種の大陸文化として日本に伝わり、さらに民間に広まる浦島伝説に吸収され、室町時代までに定着していた。一方、「紫煙（雲）」が漢文体浦島太郎伝説にも現われることは、浦島伝説における「白煙」から「紫煙（雲）」への変化が偶然ではないことを物語り、大陸文化の浦島伝説に与えた影響を明示するものである。「紫煙」がこの時期に登場したことは、道教思想の流行を反映している。明治の作家巖谷小波が「紫煙」を万葉集の「白煙」に戻したということは、一種の国粹護持であり、伝統文化への回帰と言えるかも知れない。

一、当代与室町时代的浦岛太郎传说

在今天的日本，无论男女老幼几乎都熟悉浦岛太郎传说。这个民间传说流传亘古，但在日本家喻户晓则始于明治后期。作家严谷小波将浦岛太郎的古老传说改编成现代日文的短故事，明治43年（1910）被当时的文部省指定为小学教科书内容。从此，日本人从孩提时代就熟记了这则传说。

严谷小波改编的浦岛太郎传说内容梗概如下：

从前有个叫浦岛太郎的年轻人，一天，他在海边看到一群孩子把抓到了一只海龟当玩具耍。浦岛太郎觉得可怜，便用钱买下了这只海龟，并把它放回了大海。两三天后，浦岛太郎出海钓鱼时，忽然遇到了一只大海龟，邀请浦岛太郎去龙宫造



访。浦岛太郎欣然允诺。于是海龟载着浦岛太郎来到了龙宫。龙宫的公主与浦岛太郎一见钟情，喜结良缘。两人相濡以沫，难分难离。日月荏苒。一天，浦岛太郎忽然思念起故乡来，提出要回故乡看看。公主与浦岛太郎依依惜别，临走时，给了他一个八宝盒，叮嘱无论如何不得打开。浦岛太郎回到故乡，旧貌荡然无存，父母早已亡故，乡邻无一熟人。惊乍之际，浦岛太郎忘记了公主的叮嘱，打开了八宝盒。只见里面冒出一缕白烟，顷刻之间，年轻的浦岛太郎成了一个白发苍苍的老人。

严谷小波的现代版浦岛太郎传说是根据室町时代的御伽草子（室町时代流行的一种通俗文学体裁的小说，文中根据情节附有插图）《浦岛太郎》改编的。将御伽草子《浦岛太郎》（以下略称《浦岛太郎》（伽））与现代版浦岛太郎加以比较，可以看到，情节大致相同，但也不乏不同之处。如：在《浦岛太郎》（伽）中，浦岛太郎在海上遇到的是个求救的女子，她央求浦岛太郎把她送到自己的住所，她的住所是海中的龙宫。女子在龙宫挑明了自己的公主身份，并称自己是日前被浦岛太郎在海边从孩子手中救出的龟的化身。在传说的末尾，打开八宝盒的浦岛太郎变成鹤升天了，成了丹后国的明神。

其中特别耐人寻味的是，在浦岛太郎大惊失色、打开八宝盒以后，有这样一段描写：

“この箱（即八宝盒。笔者注）をあけて見れば、中より紫の煙三すじ上がりがりけり、これを見れば、二十四、五の齡も、たちまちに変わりはてける。

さて、浦島は鶴になりて、虚空に飛び上がりける。そもそも、この浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中にたたみいれにけり、さてこそ、七百年の齡を保ちける。”

在现代版浦岛太郎传说中，打开八宝盒后，里面冒出来的是白色的烟雾。在《浦岛太郎》（伽）中，八宝盒冒出来的烟雾不是“白色”而是“紫色”的。此外，后者还阐明，是“龟”把浦岛太郎的寿命保存在八宝盒内，使他得以活到七百岁。

这里，我们关注两个问题：一、为什么《浦岛太郎》（伽）的八宝盒中冒出来的烟雾是“紫色”的？二、为什么龟会成为浦岛太郎寿命的主宰者？它与“紫色”烟雾又有什么关系？